

災害時看護管理実習における学生の学習到達度と今後の課題

片穂野邦子¹⁾・吉田恵理子¹⁾・松本 幸子¹⁾
高比良祥子¹⁾・内海 文子¹⁾

Student's Study Achievement and Future Subjects on Disaster Nursing Management Practice

Kuniko KATAHONO, Eriko YOSHIDA, Sachiko MATSUMOTO,
Sachiko TAKAHIRA and Fumiko UTSUMI

要 約

本学科における災害時看護管理実習の評価と課題を明らかにする目的で、平成16年度災害時看護管理実習を終了した学生に、学習到達度、実習目標と実習内容の整合性に関する質問紙調査を行った。平成15年度の授業評価から実習内容の改善に取り組み、今回の調査では実習目標は概ね達成されており、教員がねらいとしている学習目標と実習内容の整合性についても比較的高い割合で一致していた。明らかになった課題と今後の取り組みは、1)「二次救命処置」、「国際的な協力体制」、「人的災害」についての目標の達成度を高めるため、実習方法の変更、講義内容の工夫、課題内容の工夫が必要である、2) 課題学習報告会を現地実習の前に配置したことは評価できたが、学生が学習を共有し主体的に参加できるよう報告会の運営方法について検討する、3) 現地実習での施設見学時間について、時間的余裕を持ったスケジュールとなるよう現地担当者との調整を行う、4) 外部講師や施設を活用した災害もしくは防災訓練などの体験型学習を組み入れる、5) 総合看護として全看護領域が関わる実習を構成する、6) 4年次前期に実施している地域看護実習および総合実習との時期の調整を行う、である。本研究で得られた結果は、今後の実習内容のさらなる改善と、平成19年度の改定カリキュラム対応の「災害看護学」の構築に向けて、総合科目としての位置づけや内容・方法の検討時に活用できる。

キーワード：災害看護、看護基礎教育、臨地実習、看護学生、学習到達度

はじめに

日本における災害看護に関連した看護基礎教育は、日本赤十字社が設置主体である看護系大学や看護師養成施設において、それぞれ独自の教育で行われてきた。平成7年の阪神・淡路大震災を契機に、防災や危機管理に関する意識は大きく変化し、災害看護学の確立と発展の必要性が提案され、看護基礎教育の中での「災害看護教育」の必要性についても関心が持たれるようになった¹⁾²⁾。それぞれの看護教育機関では、災害看護学を学生が理解しやすいように、シミュレーションやロールプレイ、地域や施設で行なわれる防災訓練への参加

などの体験型学習と講義を組み合わせた内容など、様々な工夫をしながら教育を行なっている^{1)~4)}。

本学の看護学科では、平成11年の開学時より4年次に総合看護「災害時看護管理実習」を位置づけ、平成14年度から開講している。当学科では、災害時の看護管理に関する講義、蘇生訓練用生体シミュレータを用いた体験型学習や、長崎県で起きた雲仙普賢岳噴火災害の経験を例に看護職や住民の体験談や復興が進む被災地の見学などを取り入れ、試行錯誤しながら実習を組み立ててきた。

評価としては、2回目の実習を終えた平成15年度の時点で、学生による授業評価、実習の現地担当者および教員を対象とした授業評価を行い、実

1) 県立長崎シーボルト大学 看護学科

習内容の改善に取り組んでいる⁵⁾⁶⁾。

今回、平成16年度の実習内容の評価と今後の課題を明らかにする事を目的として、平成16年度本学3期生を対象に「災害時看護管理実習」について質問紙調査を実施したので、その結果を報告する。

1. 県立長崎シーボルト大学 看護栄養学部 看護学科「災害時看護管理実習」の変更点

本学における「災害時看護管理実習」の目的・目標、実習計画（平成16年度）は表1、2である。平成16年度は、平成15年度の調査において明らかになった課題⁵⁾⁶⁾を踏まえて、以下の点を変更した。

実習の目的・目標と実習内容の整合性および実習スケジュールの課題に対しては、外部講師による講義内容が重複していたことに対して、講義内容や資料の重複がないように実習の目的・目標の共通理解を確認して依頼をした。課題学習報告会

は、現地実習の前に課題学習内容を共有したほうがより効果的であると考え、最終日から現地実習の前に変更した。課題学習の内容と展開方法の課題に対しては、5つの課題のうち「長崎県下の自然災害」を外し、「人的災害と危機管理」を「災害に関する危機管理」に変更した。また、平成15年度までは学生は提示された課題を選択しテーマをグループで設定し学習を行ったが、平成16年度は教員が予めテーマを設定した（表2）。

課題の中で今年度変更できなかったことは、4年次前期に実施される地域看護実習および総合実習との実習時期の問題についてであり、それぞれの実習の受け入れ施設の状況により時期の変更は困難であった。また、科目の位置づけ・あり方の不明確さについては、平成19年度の改正カリキュラムから総合看護「災害看護学」として位置づけられるため、その構築に向けての継続した課題とした。

表1 平成16年度災害時看護管理実習の目的・目標

I. 目的	
1. 災害の発生に伴い、被災者の生命の安全確保に対応した地域および医療施設における救急医療体制および看護管理を学ぶ。 2. 災害を想定しての日常における危機管理の考え方について学ぶ。	
実 習 目 標	行 動 目 標
1. 災害時の救命に対応できるように救急蘇生の理論を理解し、一次および二次救命処置に対応できる能力を身につける。	1) 救急蘇生法の理論を理解し説明できる。 2) 救急蘇生一次救命処置を正しく行うことができる。 3) 救急蘇生二次救命処置を理解し、その介助方法を説明できる。 4) 初療展開時の看護の要点、トリアージについて説明できる。
2. 災害発生時の救急医療体制および看護管理について理解する。	1) 地域防災体制、特に災害医療体制および救援体制について学ぶ。 2) 災害発生時、受入施設として危機管理対応について学ぶ。 (救援活動の場の確保、人員確保、物流確保、他機関との連携、等) 3) 災害発生時、被災施設としての危機管理について学ぶ。 (入院患者の安全確保・救助、施設ライフラインの確保、施設内指示命令系統の確立、他機関との連携、等) 4) 災害発生に対応した看護師の役割と機能を説明できる。
3. 被災者の救命活動と同時に精神的な支援活動について理解する。	1) 災害が地域住民の生活環境、地域産業および経済などに対して及ぼす影響と、復興支援について説明できる。 2) 災害が被災者および関係する人々に精神的な打撃を与えることを説明できる。 3) 被災者やその関係者、および救援を担当した職員等の精神的打撃を癒すための、こころのケアの必要性を説明できる。 4) 災害に関連したボランティア活動の実態を説明できる。 5) 災害に対する国際的な協体制について説明できる。
4. 災害発生時の適切な対応のために、日常看護における危機管理について理解する。	1) 災害の種類とその内容を説明できる。 2) 自然災害サイクルをふまえた地域における災害時避難訓練の必要性を説明できる。 3) 医療施設火災、工場爆発、造船所爆発等、予測される人的災害に対する避難訓練等の防災対策の必要性を説明できる。 4) 救命活動に関連した知識および技術の習得を目的とする看護師教育の内容とその必要性を説明できる。 5) 災害発生に適切に対応するための医材・衛材・薬剤などの備蓄体制やライフライン確保体制などを説明できる。

2. 研究目的

- 1) 学生の学習到達度を評価する。
- 2) 実習目標を達成するために構成した実習内容で、学生が学習できているのかを評価する。
- 3) 本実習の課題を明らかにし、今後の授業構築に役立てる。

3. 研究方法

1) 調査対象と方法

平成16年度災害時看護管理実習を履修した本学看護学科4年次生62名を対象とし、自記式による質問紙調査を実施した。

調査内容1は、「Ⅰ. 実習目標を達成するために行動目標がどのくらい達成できたか」とし、各行動目標について4段階尺度を設け、最も当てはまる回答を1つ選択してもらった。

調査内容2は、「Ⅱ. 実習目標は実際の実習内容のどの項目を通して学ぶことができたか」とし、

「a. 災害医療と看護の講義」「b. 心肺脳蘇生法の理論の講義」「c. 心肺脳蘇生法の演習」「d. 長崎県の災害救援体制の講義」「e. 救護班の活動の実際の講義」「f. 課題学習および報告会」「g. 島原被災復興状況の説明」「h. 島原被災者の体験談」「i. 被災関連施設見学」「j. 災害看護管理の実際の講義」「k. 県立島原病院施設見学」「l. 火砕流被災者の救急処置の講義」の12項目から、無制限選択をもらった。

調査内容3は、本実習についての気づきや改善点など、本実習がより充実するための実習内容について自由記載をもらった。

2) 分析方法

(1) 調査内容1:「Ⅰ. 実習目標を達成するために行動目標がどのくらい達成できたか」と考えるか」

調査項目は、災害時看護管理実習の4つの目標に対して、18項目を設定した。「当てはまる」、「やや当てはまる」、「あまり当てはまらない」、「当てはまらない」、の4段階評価の回答に対して、4

表2 実習計画

平成16年度 総合看護「災害時看護管理実習」				
時期 4年次 前期 1単位 5月24日(月)～28日(金)				
日程		実習内容	実習場所	担当等
月	AM	オリエンテーション 災害医療と看護(講義)	講義室	看護教員
	PM	心肺脳蘇生法の理論 心肺脳蘇生法の実技演習	講義室 実習室	看護教員
火	AM	長崎県の災害救援体制 災害時救護班活動の実際	講義室	県消防防災課職員 日本赤十字社長崎原爆病院看護部長
	PM	心肺脳蘇生法テスト 課題学習	講義室 演習室	看護教員
水	AM	課題学習報告会準備	演習室	学生グループ
	PM	課題報告会	講義室	学生主体に運営
木	AM	現地へ移動		
	PM	被災・復興状況説明 被災者の体験談 災害関連施設見学*	島原市 深江町	島原市消防防災課職員 災害関連NPO法人役員
金	AM	医療施設における災害対応の実際 (看護職の体験、看護管理の実際) 施設見学	県立島原病院	看護部長 看護師長 元看護部長
	PM	災害時の救急医療の実際 (熱傷事例を中心とした対応)	県立島原病院	元病院長
*災害関連施設(土石流被災家屋保存公園、雲仙岳災害記念館、大野木場・砂防未来館、平成新山ネイチャーセンター)				
課題学習テーマ(学生は一つテーマを選び、1グループ7～8人で学習を進める)				
1. 災害に関する危機管理(A医療施設における危機管理、B地域における危機管理)				
2. 災害に関するボランティア活動(A市民ボランティア活動、Bボランティア看護師の活動)				
3. 災害にかかわる心のケア(A被災者の心のケア、B支援者の心のケア)				
4. 災害に対する国際的な協力活動(A国際救援の仕組み、B活動の実際)				

点から1点を配点し、4点満点で点数化した。点数が高いほうが、評価が高い。点数化後、4点満点中の得点率を算出した。

(2) 調査内容2:「Ⅱ. 実習目標は実際の実習内容のどの項目を通して学ぶことができたか」

各行動目標において、学生が学習できたとして

選択した実習内容の項目の人数と比率を算出した。また、行動目標と学生が学べたと回答した実習内容の項目を対比した。

(3) 調査内容3の自由記載

自由記載の各項目について、記述内容を簡潔な1文にまとめコードとした。さらに、意味内容が

表3 目標に対する学生の評価点

N=62

		平均値±SD (4点満点)	得点率 (%)
実習目標1	災害時の救命に対応できるように救急蘇生の理論を理解し、一次および二次救命処置に対応できる能力を身につける	3.24±0.42	81.0
行動目標1-1	救急蘇生法の理論を理解し説明できる	3.29±0.58	
行動目標1-2	救急蘇生一次救命処置を正しく行うことができる	3.47±0.59	
行動目標1-3	救急蘇生二次救命処置を理解し、その介助方法を説明できる	2.85±0.70	
行動目標1-4	初療展開時の看護の要点、トリアージについて説明できる	3.34±0.63	
実習目標2	災害発生時の救急医療体制および看護管理について理解する	3.20±0.44	80.0
行動目標2-1	地域防災体制、特に災害医療体制および救援体制について学ぶ	3.15±0.62	
行動目標2-2	災害発生時、受入施設としての危機管理対応について学ぶ	3.15±0.62	
行動目標2-3	災害発生時、被災施設としての危機管理について学ぶ	3.26±0.60	
行動目標2-4	災害発生に対応した看護師の役割と機能を説明できる	3.26±0.57	
実習目標3	被災者の身体的・精神的・社会的な支援活動について理解する	3.23±0.45	80.8
行動目標3-1	災害が地域住民の生活環境、地域産業および経済などに対して及ぼす影響と、復興支援について説明できる	3.02±0.71	
行動目標3-2	災害が被災者および関係する人々に精神的な打撃を与えることを説明できる	3.66±0.51	
行動目標3-3	被災者やその関係者、および救援を担当した職員等の精神的打撃を癒すための、こころのケアの必要性を説明できる	3.66±0.57	
行動目標3-4	災害に関連したボランティア活動の実態を説明できる	3.08±0.64	
行動目標3-5	災害に対する国際的な協力体制について説明できる	2.73±0.79	
実習目標4	災害発生時の適切な対応のための日常看護における危機管理について理解する	3.14±0.49	78.5
行動目標4-1	災害の種類とその内容を説明できる	3.13±0.66	
行動目標4-2	自然災害サイクルをふまえた地域における防災対策の必要性を説明できる	3.13±0.69	
行動目標4-3	医療施設火災、工場爆発、造船所爆発等、予測される人的災害に対する避難訓練等の防災対策の必要性を説明できる	2.94±0.74	
行動目標4-4	救命活動に関連した知識・技術の習得を目的とする看護師教育の内容とその必要性を説明できる	3.24±0.59	
行動目標4-5	災害発生に適切に対応するための医材・衛材・薬剤などの備蓄体制やライフライン確保体制などを説明できる	3.26±0.68	

共通するコードを集め、カテゴリー化した。信頼性を高めるため、分析の各段階を共同研究者間で検討した。

3) 倫理的配慮

研究目的および結果の取り扱いについて、調査の内容は無記名であり個人を特定されることはないこと、および承諾の有無が成績に影響しないことを口頭にて説明を行い、同意の得られた学生に対し調査票を配布した。また、結果は今後の実習の改善のために使用し、その内容を研究的にまとめて報告することを説明し同意を得た。

4. 結 果

調査票の回収率および有効回答は62名(100%)であった。

1) 調査内容1：「Ⅰ. 実習目標を達成するために行動目標がどのくらい達成できたと考えるか」

目標に対する学生の評価点を表3に示す。

(1) 実習目標1『災害時の救命に対応できるように救急蘇生の理論を理解し、一次および二次救命処置に対応できる能力を身につける』

平均点は、3.24点であり、得点率81.0%であった。4つの項目では行動目標1-2「救急蘇生一次救命処置を正しく行うことができる」が3.47点と最も高く、行動目標1-3「救急蘇生二次救命処置を理解し、その介助方法を説明できる」が2.85点と最も低かった。

(2) 実習目標2『災害発生時の救急医療体制および看護管理について理解する』

平均点は、3.20点であり、得点率80.0%であった。4つの項目では、行動目標2-1「地域防災体制、特に災害医療体制および救援体制について学ぶ」、行動目標2-2「災害発生時、受入施設としての危機管理対応について学ぶ」が3.15点であり、行動目標2-3「災害発生時、被災施設としての危機管理について学ぶ」、行動目標2-4「災害発生に対応した看護師の役割と機能を説明できる」が3.26点であった。

(3) 実習目標3『被災者の身体的・精神的・社会的な支援活動について理解する』

平均点は、3.23点であり得点率80.8%であった。行動目標3-2「災害が被災者および関係する人々に精神的な打撃を与えることを説明できる」、

行動目標3-3「被災者やその関係者、および救援を担当した職員等の精神的打撃を癒すための、こころのケアの必要性を説明できる」が3.66点と点数が高く、行動目標3-5「災害に対する国際的な協力体制について説明できる」は、2.73点と最も低かった。

(4) 実習目標4『災害発生時の適切な対応のための日常看護における危機管理について理解する』

平均点は、3.14点であり、得点率78.5%であった。行動目標4-5「災害発生に適切に対応するための医材・衛材・薬剤などの備蓄体制やライフライン確保体制などを説明できる」が3.26点と最も高く、行動目標4-3「医療施設火災、工場爆発、造船所爆発等予想される人的災害に対する避難訓練等の防災対策の必要性を説明できる」が2.94点と最も低かった。

2) 調査内容2：「Ⅱ. 実習目標は実際の実習内容のどの項目を通して学ぶことができたか」

各行動目標と実習内容の項目、学生が学べたと回答した実習内容の項目を表4に示す。

(1) 実習目標1

行動目標1-1については、「b. 心肺脳蘇生法の理論の講義」は59名(95.2%)、「c. 心肺脳蘇生法の演習」は60名(96.8%)が選択していた。行動目標1-2については、「c. 心肺脳蘇生法の演習」は61名(98.4%)、「b. 心肺脳蘇生法の理論の講義」は56名(90.3%)であった。行動目標1-3については、「b. 心肺脳蘇生法の理論の講義」は55名(88.7%)、「c. 心肺脳蘇生法の演習」は41名(66.1%)であった。行動目標1-4については、「a. 災害医療と看護の講義」は60名(96.8%)、「j. 災害看護管理の実際の講義」は40名(64.5%)、「l. 火砕流被災者の救急処置の講義」は34名(54.8%)であった。

(2) 実習目標2

行動目標2-1については、「a. 災害医療と看護の講義」は21名(33.9%)、「d. 長崎県の災害救援体制の講義」は47名(75.8%)、「e. 救護班の活動の実際の講義」は28名(45.2%)、「f. 課題学習および報告会」は42名(67.7%)、「j. 災害看護管理の実際の講義」は28名(45.2%)、「k. 県立島原病院施設見学」は32名(51.6%)であった。行動目標2-2は、「a. 災害医療と看護の

表4 行動目標と実習内容の項目および学生が学べたと回答した実習内容の項目

人 (%) *無制限選択

行動目標	実習内容の項目	a. 災害医療と看護の講義	b. 心肺脳蘇生法の理論の講義	c. 心肺脳蘇生法の演習	d. 長崎県の災害救援体制の講義	e. 救護班の活動の実際の講義	f. 課題学習および報告会	g. 島原被災復興状況の説明	h. 島原被災者の体験談	i. 被災関連施設見学	j. 災害看護管理の実際の講義	k. 県立島原病院施設見学	l. 火砕流被災者の救急処置の講義
行動目標 1-1	救急蘇生法の理論を理解し説明できる	34(54.8)	59(95.2)	60(96.8)	2(3.2)	10(16.1)	4(6.5)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1.6)	1(1.6)	2(3.2)
行動目標 1-2	救急蘇生一次救命処置を正しく行うことができる	22(35.5)	56(90.3)	61(98.4)	0(0)	4(6.5)	1(1.6)	0(0)	0(0)	0(0)	2(3.2)	1(1.6)	4(6.5)
行動目標 1-3	救急蘇生二次救命処置を理解し、その介助方法を説明できる	33(53.2)	55(88.7)	41(66.1)	1(1.6)	10(16.1)	1(1.6)	0(0)	0(0)	0(0)	4(6.5)	6(9.7)	16(25.8)
行動目標 1-4	初療展開時の看護の要点、トリアージについて説明できる	60(96.8)	24(38.7)	16(25.8)	9(14.5)	34(54.8)	33(53.2)	1(1.6)	0(0)	1(1.6)	40(64.5)	15(24.2)	34(54.8)
行動目標 2-1	地域防災体制、特に災害医療体制および救援体制について学ぶ	21(33.9)	0(0)	0(0)	47(75.8)	28(45.2)	42(67.7)	23(37.1)	20(32.3)	23(37.1)	28(45.2)	32(51.6)	22(35.5)
行動目標 2-2	災害発生時、受入施設としての危機管理対応について学ぶ(救活活動の場の確保、人員確保、物流確保、他機関との連携、等)	16(25.8)	1(1.6)	0(0)	17(27.4)	25(40.3)	38(61.3)	7(11.3)	8(12.9)	14(22.6)	43(69.4)	46(74.2)	28(45.2)
行動目標 2-3	災害発生時、被災施設としての危機管理について学ぶ(入院患者の安全確保・救助、施設ライフラインの確保、施設内指示命令系統の確立、他機関との連携、等)	15(24.2)	0(0)	0(0)	23(37.1)	15(24.2)	30(48.4)	11(17.7)	6(9.7)	19(30.6)	42(67.7)	51(82.3)	30(48.4)
行動目標 2-4	災害発生に対応した看護師の役割と機能を説明できる	49(79.0)	13(21)	13(21)	9(14.5)	40(64.5)	39(62.9)	1(1.6)	3(4.8)	3(4.8)	56(90.3)	23(37.1)	29(46.8)
行動目標 3-1	災害が地域住民の生活環境、地域産業および経済などに対して及ぼす影響と、復興支援について説明できる	7(11.3)	0(0)	0(0)	14(22.6)	3(4.8)	21(33.9)	54(87.1)	52(83.9)	52(83.9)	3(4.8)	3(4.8)	2(3.2)
行動目標 3-2	災害が被災者および関係する人々に精神的な打撃を与えることを説明できる	26(41.9)	1(1.6)	1(1.6)	8(12.9)	10(16.1)	54(87.1)	27(43.5)	48(77.4)	27(43.5)	45(72.6)	5(8.1)	13(21)
行動目標 3-3	被災者やその関係者、および救援を担当した職員等の精神的打撃を癒すための、こころのケアの必要性を説明できる	19(30.6)	0(0)	0(0)	1(1.6)	7(11.3)	53(85.5)	13(21)	21(33.9)	12(19.4)	58(93.5)	6(9.7)	11(17.7)
行動目標 3-4	災害に関連したボランティア活動の実態を説明できる	6(9.7)	0(0)	0(0)	4(6.5)	10(16.1)	60(96.8)	9(14.5)	16(25.8)	6(9.7)	0(0)	1(1.6)	0(0)
行動目標 3-5	災害に対する国際的な協力体制について説明できる	3(4.8)	0(0)	0(0)	0(0)	13(21)	59(95.2)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1.6)	0(0)
行動目標 4-1	災害の種類とその内容を説明できる	55(88.7)	1(1.6)	0(0)	21(33.9)	9(14.5)	35(56.5)	6(9.7)	1(1.6)	4(6.5)	2(3.2)	0(0)	0(0)
行動目標 4-2	自然災害サイクルをふまえた地域における防災対策の必要性を説明できる	30(48.4)	0(0)	0(0)	33(53.2)	5(8.1)	26(41.9)	27(43.5)	14(22.6)	22(35.5)	24(38.7)	14(22.6)	4(6.5)
行動目標 4-3	医療施設火災、工場爆発、造船所爆発等、予測される人的災害に対する避難訓練等の防災対策の必要性を説明できる	25(40.3)	2(3.2)	1(1.6)	34(54.8)	9(14.5)	15(24.2)	11(17.7)	8(12.9)	15(24.2)	19(30.6)	10(16.1)	5(8.1)
行動目標 4-4	救命活動に関連した知識・技術の習得を目的とする看護師教育の内容とその必要性を説明できる	43(69.4)	31(50.0)	26(41.9)	7(11.3)	27(43.5)	20(32.3)	0(0)	0(0)	3(4.8)	51(82.3)	16(25.8)	27(43.5)
行動目標 4-5	災害発生に適切に対応するための医材・衛材・薬剤などの備蓄体制やライフライン確保体制などを説明できる	18(29)	0(0)	0(0)	15(24.2)	16(25.8)	20(32.3)	8(12.9)	7(11.3)	8(12.9)	32(51.6)	51(82.3)	21(33.9)

■ 教員が意図して構成した実習項目

講義」は16名(25.8%)、「f. 課題学習および報告会」は38名(61.3%)、「j. 災害看護管理の実際の講義」は43名(69.4%)、「k. 県立島原病院施設見学」は46名(74.2%)、「l. 火砕流被災者の救急処置の講義」は28名(45.2%)であった。行動目標2-3は、「a. 災害医療と看護の講義」は15名(24.2%)、「f. 課題学習および報告会」は30名(48.4%)、「j. 災害看護管理の実際の講

義」は42名(67.7%)、「k. 県立島原病院施設見学」は51名(82.3%)、「l. 火砕流被災者の救急処置の講義」は30名(48.4%)であった。行動目標2-4は、「a. 災害医療と看護の講義」は49名(79.0%)、「e. 救護班の活動の実際の講義」は40名(64.5%)、「f. 課題学習および報告会」は39名(62.9%)、「j. 災害看護管理の実際の講義」は50名(90.3%)であった。

(3) 実習目標 3

行動目標 3-1 については、「g. 島原被災復興状況の説明」54名 (87.1%)、「h. 島原被災者の体験談」52名 (83.9%)、「i. 被災関連施設見学」52名 (83.9%) であった。行動目標 3-2 については、「a. 災害医療と看護の講義」は26名 (41.9%)、「f. 課題学習および報告会」は54名 (87.1%)、「h. 島原被災者の体験談」48名 (77.4%)、「j. 災害看護管理の実際の講義」は45名 (72.6%) であった。行動目標 3-3 については、「a. 災害医療と看護の講義」は19名 (30.6%)、「f. 課題学習および報告会」は53名 (85.5%)、「h. 島原被災者の体験談」21名 (33.9%)、「j. 災害看護管理の実際の講義」は58名 (93.5%) であった。行動目標 3-4 については、「f. 課題学習および報告会」は60名 (96.8%)、「h. 島原被災者の体験談」は16名 (25.8%) であった。行動目標 5 については、「a. 災害医療と看護の講義」は3名 (4.8%)、「e. 救護班の活動の実際の講義」は13名 (21%)、「f. 課題学習および報告会」は59名 (95.2%) であった。行動目標 3-4・5 について、ほとんどの学生が課題学習および報告会で学んだと選択していた。

(4) 実習目標 4

行動目標 4-1 については、「a. 災害医療と看護の講義」は55名 (88.7%) であった。行動目標 4-2 については、「a. 災害医療と看護の講義」は30名 (48.4%)、「d. 長崎県の災害救援体制の講義」は33名 (53.2%)、「f. 課題学習および報告会」は26名 (41.9%) であった。行動目標 4-3 については、「a. 災害医療と看護の講義」25名 (40.3%)、「d. 長崎県の災害救援体制の講義」は34名 (54.8%)、「f. 課題学習および報告会」15名 (24.2%) であった。行動目標 4-2・3 について教員が意図して構成した実習内容から学んだと選択した学生は50%程度であった。行動目標 4-4 については、「a. 災害医療と看護の講義」は43名 (69.4%)、「e. 救護班の活動の実際の講義」は27名 (43.5%)、「j. 災害看護管理の実際の講義」は51名 (82.3%) であった。行動目標 4-5 は、「a. 災害医療と看護の講義」は18名 (29.0%)、「j. 災害看護管理の実際の講義」32名 (51.6%)、「k. 県立島原病院施設見学」は51名 (82.3%) であった。

3) 調査内容 3：本実習がより充実するための実習内容、方法

自由記載の結果を表 5 に示す。58名が記述しており、147コードが抽出され、27のサブカテゴリー、7つのカテゴリーに分類された。以下、「**Ⅰ**」はカテゴリー、「**Ⅱ**」はサブカテゴリーを示す。

「体験談を聞く」は、『医師、看護師、保健師からの話を聞く』『被災者やその家族から話を聞く』『実際ボランティアをした人の話を聞く』という3つのサブカテゴリーからなり、計28コードあった。「体験型学習を増やす」は、『訓練への参加や被災時の生活体験をする』『心肺蘇生法の演習時間を増やす』の2つのサブカテゴリーからなり、赤十字や消防署による災害訓練への参加、災害時のシミュレーション、非常食の試食など、計9コードあった。「学習内容の重複をなくす」は、『ビデオ、スライドの重複を減らす』『内容の繰り返しを減らす』の2つのサブカテゴリーからなり、普賢岳噴火災害時のビデオやスライドが講義・実習の中で重複しており時間が無駄である、などの計11コードであった。「事前・事後の学習を含めた実習期間の設定」では、『他の実習と時期をずらす』『グループ学習の時期を保証する』『課題学習に早い時期に取り掛かるようにする』『事前に看護管理を学習する』『レポートの提出期限・方法を考える』の5つのサブカテゴリーからなり、前期に地域看護実習と総合実習がありそれぞれの事前学習を並行して行うためグループで集まる時間や個人の学習時間の確保が困難であった、などの計26コードであった。「課題学習、討議の効果的な運営」では、『課題学習報告会后に現地実習を行う』『討議時間を長くする』『討議はグループ分けをして行う』『課題学習の進め方の提示を詳しく行う』『課題学習報告会とは別に小グループでの討議時間を設ける』『討議しやすいテーマを設定する』『討議テーマをあらかじめ決める』『課題学習報告会前に現地実習を行う』の8つのサブカテゴリーからなり、課題については人的災害や国際協力に関する課題の検討というコードがあり、事前指導では課題学習の提示時期や取り組み方の綿密な説明が必要というコードがあった。報告会のコードは、皆が参加できる小グループでのディスカッション、ディスカッションの時間が短く深まらない、知識を共有した上で現地実習をしたことで学びが深まったというコード

表5 本実習がより充実するための実習内容、方法

カテゴリー	サブカテゴリー	コード数
体験談を聞く	医師、看護師、保健師からの話を聞く	13
	被災者やその家族から話を聞く	12
	実際ボランティアをした人の話を聞く	3
体験型学習を増やす	訓練への参加や被災時の生活体験をする	5
	心肺蘇生法の演習時間を増やす	4
学習内容の重複をなくす	ビデオ、スライドの重複を減らす	8
	内容の繰り返しを減らす	3
事前・事後の学習を含めた実習期間の設定	他の実習と時期をずらす	14
	グループ学習の時間を保証する	6
	課題学習に早い時期に取り掛かるようにする	2
	事前に看護管理を学習する	2
	レポートの提出期限・方法を考える	2
課題学習、討議の効果的な運営	課題学習報告会后に現地実習を行う	18
	討議時間を長くする	10
	討議はグループ分けをして行う	6
	課題学習の進め方を詳しく提示する	3
	課題学習報告会とは別に小グループでの討議時間を設定する	3
	討議しやすいテーマを設定する	2
	討議テーマをあらかじめ決める	2
課題学習報告会前に現地実習を行う	1	
見学施設の選択と十分な見学時間の確保	十分な施設見学時間を設ける	11
	見学する場所を少なくする	5
被災を体験した場所を活用した実習の継続	被災地に行くことで災害について深く考えた	6
	災害の恐ろしさを感じた	3
	災害体験を風化させないことの必要性を感じた	1
	災害時の看護の役割を学んだ	2
コード総数		147

や、逆に実習全体が見えた上で報告会を行ったほうが意見も出て深まる、などの計45コードがあった。「見学施設の選択と十分な見学時間の確保」では、「十分な施設見学時間を設ける」「見学する場所を少なくする」の2つのサブカテゴリーからなり、施設見学の時間が短くもってゆっくり見なかった、1日目の施設視察で疲労し2日目の病院実習に影響した、などの計16コードであった。「被災を体験した場所を活用した実習の継続」では、「被災地に行くことで災害について深く考えた」「災害の恐ろしさを感じた」「災害体験を風化させないことの必要性を学んだ」「災害時の看護の役割を学んだ」の4つのサブカテゴリーからなり、被災地を実際に見ることや被災した人々と関わることで災害を身近に感じ災害の恐ろしさを実感した、被災地に行ったことで災害サイクルが理解でき各期における活動の重要性を学ぶことができた、などの計12コードであった。

5. 考 察

今回、学生の学習達成度と、学生が実習目標を

実際の実習内容のどの項目を通して学ぶことができているかについて調査した。その結果と、実習内容を改善していく上での課題について考察する。

調査内容1の具体的な実習計画と実習目標および行動目標との関連については、各実習目標、行動目標の達成度を4点満点の評価でみると、平均値が一番高いのは実習目標1で3.24点(得点率81.0%)、実習目標2は3.2点(得点率80.0%)、実習目標3は3.23点(得点率80.8%)、最も低いのは実習目標4の3.14点(得点率78.5%)であり、概ね各実習目標は達成されているものと思われる。

さらにその中の各行動目標を比較してみると、やや低値なのは行動目標1-3「救急蘇生二次救命処置を理解し、その介助方法を説明できる」で2.85点、行動目標3-5「災害に対する国際的な協力体制について説明できる」で2.73点、行動目標4-3「医療施設火災、工場爆発、造船所爆発等予測される人的災害に対する避難訓練等の防災対策の必要性を説明できる」で2.94点であった。自由記載においても、人的災害や国際協力に関する課題の検討という意見があった。これらの内容は講義と演習、課題学習の中に含まれているが、

具体的な実感の伴う学習方法ではないための結果とも考えられる。学習方法の変更もしくは講義内容の工夫や、課題内容の検討が必要である。救急蘇生一次救命処置については、蘇生訓練用生体シミュレーターを使って実際の蘇生まで体験するためその達成度も高い。一方、救急蘇生二次救命処置の介助については、成人看護実習での集中治療部の見学実習などで基本的な内容を学習し、災害時看護管理実習では災害現場へ持参する医療セットを実際に確認するなどしているが、実感が伴いにくいと考えられる。救急蘇生二次救命処置は卒業後現任教育の中で習得していく技術ではあるが、看護基礎教育においても知識レベルでの修得は必要であるため、当学科における卒業時の看護技術到達度とすり合わせた行動目標および実習内容の検討が必要と考える。今後、心肺脳蘇生法の実習内容の充実と地域の病院関係機関との連携の一環として、県下の救急看護認定看護師を外部講師とした講義・演習についても検討していきたい。

調査内容2の「Ⅱ. 実習目標は実際の実習内容のどの項目を通して学ぶことができたか」の質問の結果は(表4)、教員がねらいとしている実習目標と実習内容との一致度が比較的高かった。

しかし、行動目標3-4「災害に関連したボランティア活動の実態を説明できる」については、選択した学生は25.8%と少なかった。ボランティア活動についての学生の関心は高く、課題学習でほとんどの学生が学習したと答え、課題学習の発表・討議の中でも参加したいと発言する学生も多い。現地実習で、地域での災害復興活動にボランティアとして中心的な役割を果たしてきた被災者の講義を組み入れているが、学生には被災者としての体験の内容が強く印象に残り、ボランティア活動は被災者ではない立場の人の活動と捉えているところもあると推察される。

行動目標2-3「災害発生時、被災施設としての危機管理について学ぶ」については、この行動目標は現地実習で学習できたと答えており、「災害時看護管理実習」の導入である概論的内容の講義は受けていても、学生にとってはそれらの内容は現地実習だけで学習したと認識されている。実習目標と行動目標、そのことを達成するための教育内容と学習できた内容の一致度は可能な限り高いほうがよい。

外部講師の場合では、それぞれの専門分野の講

師との本実習での学習のねらいや当該講義での学習内容の打合せが重要になる。今回の学生への質問紙調査2により、教員の意図と学生の受け止めの違いがある。その原因に教員のねらいが外部講師に十分に伝わっていないことが考えられる。平成15年度の調査結果でも実習目的・目標と講義内容の整合性の問題が課題として出てきており、それを踏まえて調整を行っている。外部講師による講義内容は、災害看護に必要な基礎知識である。外部講師の講義が学習目的に対応した内容となるように、教員から内容についての具体的な依頼をすることが重要である。自由記載においても、外部講師による講義・実習で説明内容やビデオの重複を避けて欲しいという意見があり、これらについて事前打合わせの段階で調整する必要がある。

自由記載のそのほかの内容には、課題学習報告会については、現地実習の前に行ったことは効果的であったという意見が多くあり、このことは改善点として評価できる。報告会の運営については、ディスカッションの時間や人数の変更が必要ではないかという意見があり、学生が学習を共有し主体的に参加できるように方法を見直す必要がある。現地実習については、より充実した学びになる実習内容の意見として、被災者および支援者の体験談を要望する意見が多くあった。被災者、ボランティアの体験談について前述したように、看護師についても現地実習の災害拠点病院での看護管理の講義の中で触れてはいる。また、避難所での保健師の活動の体験談を希望する意見もあった。松田は、災害看護のカリキュラム・授業展開として、①救急看護の知識・技術、②公衆衛生看護活動、③災害看護の基礎知識および特殊性、④被災者のストレス、PTSDおよびケア、⑤トリアージの基本と原則、⑥トリアージや災害時救護訓練が必要であると提案している⁷⁾。災害看護は、災害という特殊な状況におけるすべての人を対象として展開される看護であり、今後は全看護領域が関わる実習として構築していく必要がある。現地スケジュールについては、施設見学の時間を増やして欲しいという意見が昨年と同様にあり、現地担当者で見学施設の選択について再度検討し、現地での講義時間も調整するなどできるだけ時間的余裕を持ったスケジュールとなるよう調整が必要である。

新たな実習内容としては、体験型の学習として

防災訓練やトリアージなどの災害訓練のシミュレーション、非常食の試食などの意見があった。小原の看護学生の災害看護の授業に対するニーズ調査においても、トリアージへの関心が高いことが報告されている⁸⁾。防災訓練・災害訓練のシミュレーションについては、赤十字や災害拠点病院での訓練への参加を見据えた参加方法や実施時期の確認・調整が必要である。

学生は4年次の5月から7月にかけて地域看護実習(保健所、市町村)に続き、災害時看護管理実習を行う。地域看護実習前に災害時看護管理実習における課題学習を課しているため、その内容と関連させ、地域看護実習の中で災害時の保健師による地域での活動に関して現場の保健師に質問する学生もいる。また地域看護実習、災害時看護管理実習の後に続く島嶼部における総合実習でも、災害時の地域拠点病院の役割や施設設備管理体制などを質問する学生もいる。学生はそれぞれの実習を通して、地域で生活する人々への健康支援という基本的な内容を、特殊な状況や環境条件のもとで、より有効に看護が機能するためにはどうあればよいかを学習するのである。

災害対応の看護は、平穏な災害間期での看護の場における危機管理が、突然、同時に求められる多様なニーズにどのように対応できるかということであり、それは現任教育の一環として行われる内容でもある。しかし、4年次の前期に3つの実習が隣接して行われるため、並行して事前学習を行なうことの学生の負担が大きいことが自由記載からも伺われる。地域看護実習の保健所実習は、平成18年度より3年次後期からの実習ローテーションの中で実施する予定である。4年次前期に行なわれる地域看護実習の実習期間が短くなるため、実習と実習の間に期間を設けることや課題学習の時間を確保できると思われる。

さらに今後の改善点として、平成16年度の実習計画では最終日に現地実習を設定し、翌週のレポート提出をもって終了としているが、やはり実習全体を通しての学習の統合の場を設ける必要があると考え、できれば最終日に学生が主体的に取り組めるようなまとめの時間を計画したい。例えば、テーマを設定しての全体討議や学生自身の防災意識を高めることにも効果的と思われる災害避難セットの作成などが取り入れやすい内容として挙げられる。また、近年各地で地震や津波などの

自然災害や列車事故などの人的災害が続いており、実際の救援活動に参加した赤十字救護班で出動した看護職のタイムリーな講義も計画に入れるなど、科目の位置づけやあり方を吟味しながら、学生への質問紙調査の結果も生かす工夫に取り組んでいきたい。

6. まとめ

本学において行われている災害時看護管理実習についての学生への質問紙調査から、学生の達成度を明らかにし、実習目標を学習するための実習内容の整合性を確認し、本実習の今後の課題について考察した。今回の調査で、概ね実習目標は達成されていた。また、教員がねらいとしている学習目標と実習内容との一致度は比較的高かった。明らかになった課題と今後の取り組みを以下に示す。

1. 「二次救命処置」、「国際的な協力体制」、「人的災害」について、実習方法の変更、講義内容の工夫、課題内容の工夫が必要である。
2. 課題学習報告会を現地実習の前に配置したことは評価できたが、学生が学習を共有し主体的に参加できるよう報告会の運営方法について検討する。
3. 現地実習での施設見学時間について、時間的余裕を持ったスケジュールとなるよう現地担当者との調整を行う。
4. 外部講師や施設を活用した、災害もしくは防災訓練などの体験型学習を組み入れる。
5. 総合看護として全看護領域が関わる実習を構成する。
6. 4年次前期に実施している地域看護実習および総合実習との時期の調整を行う。

平成19年度に改定カリキュラム対応の総合看護「災害看護学」は開講される。今回の調査結果をもとに実習内容のさらなる改善に取り組み、本実習が総合看護の位置づけとして学科全看護領域で検討される際には基礎資料として活用したい。

引用文献

- 1) 南 裕子：災害看護学構築に向けての課題と展望。看護研究, 32(3), 3-11, 1999
- 2) 小原真理子：これからの災害看護教育 生活の側面を重視した災害看護教育の実際, 黒田裕子, 酒井明子

監修「災害看護」 220-230, 2004

- 3) 金井悦子, 山本捷子：21世紀の日本赤十字看護教育への提言, 日本赤十字武蔵野短期大学紀要(10), 25-33, 1997
- 4) 小原真理子, 他：保健婦・士学生に対する災害看護の授業展開と学び, 災害看護教育方法の開発と教育実践, 『特色ある教育研究』特別補助金研究報告書, 55-74, 2001
- 5) 松本幸子他：災害時看護管理実習における授業評価と今後の課題, 県立長崎シーボルト大学看護栄養学部紀要 第4巻, 75-83, 2003
- 6) 岩永智恵子他：災害時看護管理実習の学習効果と問題点, 県立長崎シーボルト大学看護栄養学部紀要, 第4巻, 85-94, 2003
- 7) 小原真理子：看護基礎教育における災害救護論に対する学生のニーズ, 日本災害看護学会誌, 2(1), 17-27, 2000
- 8) 松田宣子：看護教育機関の立場から災害看護の教育・研究への取り組みについて考える, 日本災害看護学会誌, 4(1), 43-45, 2002